

調所広郷没後160年忌を迎えて

調所 一郎(調所広郷七代目)

寄稿

篤姫に始まり篤姫に終わろうとしている平成二十年。私の先祖である幕末の薩摩藩家老・調所広郷(通称・笑左衛門)も、大河ドラマ「篤姫」では平幹二郎氏の熱演で露払いをさせていただき、末裔として光栄なことであった。

の栽培から出荷までを指導している。すでに大坂などで高く売りさばくルートは開発済みであった。

物の一つとなっている菜の花であり、その名を冠した「菜の花マラソン」もある。また、ハゼ蠅に関して

十二代沈壽官が若くして活躍していた頃、笑左衛門は、やはり殖産興業の一環としての薩摩焼振興のため、たびたび苗代川(現日置市美山)を実際に訪れているので、苗代川に伝わる笑左衛門の話も多い。笑左衛門の死後、その遺品を埋めて村の人達が建立した招魂墓も残っている。

とになった。この墓は私が七年前、東京の九品仏浄真寺から分骨改葬して建立したものである。昭和六年七月までは、旧福昌寺墓地に在ったのだが、祖父広良が、どういう理由でか東京に改葬した。この前年から直木三十五の「南国太平記」がヒットしており、そこで斉彬公や西郷どんと対立した家老として描かれたことと関係がありそう。鹿児島には以前から調所家を敵視するような土壌があり、祖父が旧制七高を中退したのも笑左衛門絡みと聞いている。

功罪半ばした薩摩藩家老

複眼で今後見据えたい

劇中では笑左衛門と篤姫の実家である今和泉島津家が対立しているように描かれていたが、実際は、その反対で、笑左衛門は腹心の部下を指宿に派遣し、菜種やハゼ蠅といった商品作物

つまり今和泉島津家は、天保の財政改革における同志であったのだ。ちなみに、その時の名残が指宿の名

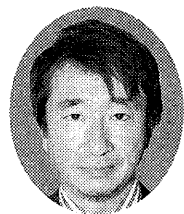
も、十四代沈壽官氏によると、少年時代の小松帶刀(肝付尚五郎)に笑左衛門が殖産興業の話のなかでハゼ蠅

そして本日、十二月十九日は笑左衛門の命日(嘉永元年一八四八年)であり、偶然、篤姫の誕生日(天保六年一八三五年)と同じである。ちょうど没後百六

郷どんと対立した家老として描かれたことと関係がありそう。鹿児島には以前から調所家を敵視するよう

する笑左衛門の「役割」をているように、奄美において奇効(きこう)を極めていたことはよく耳にする。笑左衛門所用の刀の手入れをしていて、ふと刀に映った自分の顔が、同じように百六十年以上前に映っていたのであろう笑左衛門の顔と重なって見えた瞬間、現在と過去が一瞬にして繋がったように思えた。その先から問いかけてくる「光と影」に、今後とも複眼的な目を向けていきたいと考えている。

しかしながら、笑左衛門自身が奄美の黒糖を「御改革第一之根本」と位置付けている。



ずしよ・いちろう氏 1960年生まれ。慶応大学卒。コンサルティング会社を営む。調所広郷の七代目の子孫にあたる。横浜市在住。



調所広郷の像

天保山の松林のなかにたたずむ調所広郷の像

鹿児島市天保山町